

作／田口浩一郎

傾斜空間 第五回公演

プ[○]チ・トリアノン

舞台上にテーブルと椅子が3つ。木製の粗末なものが望ましい。舞台は少し暗め。そこにランタンを持つて、一人の男が入ってくる。もう一方の手に、冊子、インク、ペンなどを持っている。男は豪華な軍服を着ている。

男、下手の椅子に腰を下ろし、独り内容をつぶやきながら冊子に文字を書き入れる。この間、かすかに砲声が聞こえる。

男 1789年、7月14日、門衛・夜番報告。異常なし。が、時折砲声が聞こえる。パリで暴動が起きている模様。暴徒がここまで押し寄せて来る事は無かろうが、引継ぎの者はおさおさ注意怠りなきよう……と、こんなもんか。

ドアの開く音。やはりランタンを持った男がもう一人、舞台上に上がってくる。片手にはワインボトルとグラス。

男2 よう。

男 待ちかねたぞ。

男2 何か異常は。

男 ない。

男2 そうか。

男 退屈だよ。これなら出撃を命令されてたほうが良かったかもな。

男2 あはは、そうか。

男 まあ、パリも物騒だからな。運が良いのかも知らないが。

男2 おう、ついに始まったぞ。

男 そうか…。

男2 刑務所が暴徒に取り囲まれてる。

男 イヤだねえ。何にも起こらなきゃ今まで通りただメシ喰らってられるものを。

男2 ああ。

男 それにしてもお前…。

男2 あん？

男 似合わんな。

男2 抜かせ。お互い様だ。

男 へ、フランスまで来てまさか仮装パーティーさせられるとは思わなかったぜ。

男2 しょうがねえ、王妃様の趣味らしいぜ。

男 このゴテゴテの軍服がか？

男2 いやあ、まあご本人から聞いたわけじゃねえがよ。分かるだろう……ここまでのあのギン
ギラギンの町並みを見りゃさ。

男 ああ、なるほどな。

男2 まったく、こちとら一辺も見たことがねえ女の着せ替え人形に付き合わされてよ。

男 ああ、軍服と一緒に階級も上げてくれれば良かったのにな。

男2 ははは。

男 よし、じゃあ交代だ。眠くてしょうがねえ。

男2 それがそうはいかねえ。

男 なんだと？

男2 パリ暴動のため、王宮の警護を強化する。各屯所に配備する人員は2倍とし、夜番
の者は朝番の者と引き続き警護に当たるべし。

男 なんだと！

男2 連隊長のお達しだ。その代わり給料にお手当て上乘せだそうだ。へへ、すっかり稼げ。

男 冗談じゃねえ。こっちは寝ずの番でクタクタなのに。あいつ俺を殺す気か！

男2 いやいや、その憤懣をお慰めしようと今日はこれをお持ちしましたよ。

男2、ワインとグラスを差し出す。

男 おい、良いのかよ。そんなもん持ち込んでよ…。

男2 ほお、真面目だな。要らねえのか？

男 そんなワケあるめえ。

男2 そう言うと思ったよ。じゃあ開けるぞ。

男 おう。

男2 あ…。

男 どうした。

男2 …栓抜き…。

男 …。

男2 …忘れた。

男 …。

男2 …。

男 じゃあ、俺、帰るわ。

男2 待て待て。

男 連隊長に体調不良だつて言つといてくれや。

男2 命令違反は懲罰だぜ。

男 だからその辺お前が口裏合わせろ。

男2 なんだよ、酒が飲めねえくらいで職場放棄か。

男 冗談じゃねえ、契約外業務だぜ。酒もねえのに耐えられるか。眠いんだよ俺は。

男2 俺を一人こんなつまらんとこに残して行くのか。

男 俺はそのつまらんとこに一晩中座つて番をしてたんだ。

男2 どうあつても行くのか？

男 ああ、俺を引き止めたかつたら栓抜きを持つて来な。俺がその扉から出て行くまでに
な。

男2 調子に乗りやがつて。お前聖書の言葉を知らねえのか？

男 聖書だと？

男2 信じよ、されば与えられん。

男 けつ、小賢しい。何が言いてえんだよ。

男2 栓抜きが手に入らねえのはテメエの信心が足りないからさ。祈れ、できれば次の交替時

間まで。そうすりゃ栓抜きが向こうからやってくる「こと」だつてあるかも知れねえぜ。

その後も、男二人、栓抜きについて言い争い続ける。するとその横を、バスケットを小脇に激しく着飾った貴婦人が「ご苦労」と言つて通り過ぎる。

男2 待たれよ。

貴婦人は？

男2 この先は王后陛下の許可なしには進めません。

貴婦人 …。

男2 …？

貴婦人、通り過ぎようとする。

男2 待たれい！

貴婦人 なんじゃ、騒々しい。

男2 王后陛下の許可はございますか。

貴婦人 ない。

男2 では、お引取りを。

貴婦人 イヤじゃ。

男2 困りましたな。では我々も貴方様を曲者として捕縛しなければなりません。それで
もよろしいのか？

貴婦人 曲者はお前らであろう。

男2 ご婦人、これ以上おふざけあるとご容赦できませんぞ。

貴婦人 ふざけてなどおらん。

男 構わねえ、捕まえちまえよ。

男2 馬鹿野郎、相手は貴族だぞ(貴婦人を隠すように男を引き寄せて耳打ちで)

男 こんな夜更けに王妃の離宮に踏み込もうなんざ狼藉以外の何者でもねえ。誉められ
こそすれ罰せられるワケがねえよ。

男2 そういうもんか？

男 そういうもんだ。

男2 狼藉者！覚悟めされい！（体を離す）

貴婦人 開けてたも。(貴婦人、両手に栓抜きとワインボトルを持っている)

男二人 あー！

貴婦人 開けてたも。

男2 見ろ見ろ！

男 せ、せ、栓抜き。

貴婦人 今日は飲みたい気分なのじゃ。

男2 信仰の勝利だ。

男 神様っているんだなあ。

貴婦人 良いコトがあつたのじゃ。

男2 な、な、だから言ったじゃねえか。

男 俺、毎週教会行こうかな。

貴婦人 開けてたも。

男 はい、ただいま。

男2 つまみなどを…おい、お前、つまみ。

男 そんなもんあるか。

男2 神の使いにつまみの一つも出さなきゃ失礼だろうが！

貴婦人 案ずるな、持つておる。

男二人 神よ！

貴婦人 生ハムと。パルミジャーノチーズ、オマールエビの。パイ包み…。

男 すげえ！

男2 食ったことねえ！

貴婦人 ノルマンディー産、牡蠣のグラタンソース。

男 もはやおつまみの域を超えていますね。

貴婦人 アペリティブはこんなもんか。

男2 まだあるんすか！

貴婦人 最後はあの方のお気に入り、スウェーデン産イワシのオイル漬。

男 なんだ。

男2 意外と地味っすね。

貴婦人 要らんのか。

男二人 頂きます。

貴婦人 では、ボナペティ。(何故か合掌)

男二人 ボナペティ。(合掌)

男、食べようとし始める。時折砲声。

男2 おう、酒飲もうぜ酒(自分の持ってきた酒のコルクを抜き始める)

男 馬鹿、こつちの高そうなやつにしろよ。

男2 …。(渋々貴婦人の持ち込んだものを開ける)

男 ところで…。

貴婦人 うむ…。

男 あんた、誰？

貴婦人 …。

男2 …。

貴婦人 話せば、ちと長くなるぞ。

男 承知。

貴婦人 妾は…マリー・アントワネット・ジョゼファ・ジャンヌ・ド・ロレーヌ・オートリツシユ。

男2 あはは、ホントに長えや。

男 …もう一回。

貴婦人 しつこいのう。マリー・アントワネット・ジョゼファ…。

男二人 なにい！

貴婦人 何を驚くか。

男 だつて……。 (懐を探る)

貴婦人 ここは王妃の離宮ぞ。王妃がいて何の不思議がある。

男、懐から出した紙片と貴婦人を交互に見比べる。男2、一緒に覗き込む。

男 全然違う。

男2 何だこれ。

男 王妃の似顔絵だよ。

男2 これが？

男 ああ。

男2 ……全然違うじゃねえか。

男 あの、これ……ご本人ですよね。

貴婦人 おお、懐かしいのう。

男2 ホントかよ。もう形が違つてるぞ。

貴婦人 当然じゃ。輿入れしたばかりの頃描いたものゆえ。

男2 だって骨格が。

貴婦人 子供も産んだゆえ。

男 …。

貴婦人 20年前ゆえ。

男2 おい、ホントかよ？

男 待て、まだ本人と決まったわけじゃねえ。…ご婦人。

貴婦人 王妃じゃ。

男 我々も仕事です。

貴婦人 うむ。

男 あなたの身元も確認せぬままこの場を通したとあつては我々もお叱りを受けるので
す。

貴婦人 疑いようもないと思うが。

男 何か証拠をお持ちですか？あなたが王妃だと証明できるような…何か。

貴婦人 失礼ではないか。王妃の身元を疑うとは。

男 仕事ですので。

貴婦人 お前たち…二人ともバステイーユ送りじゃ。

男2 おい！（男に）

男 失礼ながら不可能ですな。

貴婦人 なに？

男 バステイーユは今、暴徒に包囲されています。

貴婦人 おのれ、謀反人どもめ。お前らも謀反人であろう！

男 私どもは王妃の忠実な兵士でございます。

貴婦人 では、そこをどけ！

男 では、証拠を。

貴婦人 …いつもの見張りはどうした！

男 いつもの見張り？

貴婦人 いつもこの時間は同じ男が立っておる。妾がこの時間、ここを通ることもあの者なら知つておるはずじゃ。

男2 ああ、近衛兵の方々ですか。

男 彼らなら居ませんよ。

貴婦人 なに？

男2 暴徒の鎮圧に駆り出されています。

貴婦人 お前らは近衛兵ではないのか？

男2 我々は傭兵です。フランスに忠節なスイスの同盟兵ですよ。

貴婦人 お前たち雇われ兵か？

男 左様で。非番のところ叩き起こされて夜警を申しつかりました。迷惑な話です。

貴婦人 なんと、王宮内の警護を外国の雇われ兵に任せているとは。

男 いやあ、そう言わず。スイスの雇われ兵も役に立ちますぜ。

貴婦人 呼び戻せ！

男 は？

貴婦人 今すぐ近衛隊を呼び戻すのじゃ。

男2 いや、ですがそうしますと暴徒の鎮圧は。

貴婦人 構わぬ！刑務所と王宮とどっちが大事だと思っておるのじゃ。

男2 そうですか、では、そのように。

男 待て。

男2 何だよ。

男 まだこのお方が王妃かどうか分からん。

男2 お前、いつからそんなに勤務熱心になったんだ！彼女は貴婦人だ。身なりも立派だ。それだけで十分だろうが。（小声で）

男 うるさい！俺はなあ、王妃の隠れ崇拝者だったんだよ。だからこうして肖像画も持ち歩いてるんだ！それが…この女が王妃だと…。（小声で）

貴婦人 早くせよ。雇われ兵。

男 絶対に認めん。（小声で）

男2 …ふむ。困りましたなあ。さりとて、この男の申すことも一理あります。なにしろ貴方様が王妃だと証明するものが20年前の肖像画一枚なのですから。

貴婦人 どうしろというのじゃ。

男2 何か、もつと確かな証拠はございませんか。そうでなければ我々も命令をお聞きするわけには参らないのです。

貴婦人 うむ…それも道理か。

男2 せめて王族である証拠をお見せ下さい。

貴婦人 そうよのう…では、これならどうじゃ。

貴婦人、バスケットから豪華な装丁の本を出す。

男2　これは…フルール・ド・リス。

貴婦人　そうじゃ。王家の紋章じゃ。

男　…。

男2　…決まりだな。

男　…。

貴婦人　では、早々に近衛隊を呼び戻せ。

男2　御意！

男2、上手扉から退場。男、本を手に取り。パラパラとめくる。

貴婦人　ふー、妾は疲れたぞ。…寝る。

貴婦人、男の手から本を奪おうとする。男、取られないように本を引く。

男　　7月3日、今日の獲物、ウサギ二匹、野鳩一匹。…日記ですな。

貴婦人 返せ！

男 王妃は狩りをされるのですか？

貴婦人 …。

男 これは貴女のものではありませんね。

貴婦人 …。

男 ご身分とお名前をお伺いします。ことと次第によっては処罰も覚悟していただきますぞ。

貴婦人 身分は王妃、名はマリー・アントワネット…。

男 ですから、真実をお聞かせ下さい。

貴婦人 妾は真実しか語らん。

男 言い逃れは貴女の為になりませんぞ。

貴婦人 お前こそ王妃を愚弄してただで済むと思うな。

男 私は職務に忠実なだけです。王妃がここにいたら喜ばれるでしょう。

貴婦人 妾は王妃ぞ！

男 失礼ながら信用できません。

貴婦人 …。

男 他人の：しかも王族の日記を盗み出し、王妃の名を騙る。これはどんなに身分が高くても許されない罪です。

貴婦人 …夫じゃ。

男 …何と？

貴婦人 …夫の日記じゃ。

男 …夫と申しますと？

貴婦人 国王じゃ。

男 …。

貴婦人 妻が夫の日記を持ち歩いておつても盗みにはなるまいが。

男 …。

貴婦人 どうじゃ、納得したか。

男 …言うに事欠いて。

貴婦人 …？

男 国王の名まで騙るとは！

貴婦人 …何？

男 俺はなあ、寝不足でイライラしてるんだよ！こんな仕事だつてそこで王妃様が寝てる

と思うから少しは我慢してやっってたんだ！そこ、テメエなんぞが入ってきて、恥ずかし気もなく自分が王妃だと！

貴婦人 ……

男 お前、鏡見たことあんなのか！俺の王妃様はなあ、これ（肖像画を指す）なんだよ、これ！しかも嘘がばれりゃあ大人しく捕まるかと思つたら、見苦しい言い逃れをしゃがつて。厚かましいにも程がある！

貴婦人 ……お前、妾のことが好きなのじゃな。

男 ……は？

貴婦人 ……照れずとも良い。

男 何言つてんだお前。

貴婦人 ……最近は妾のことを悪く言う輩も多い。そんなに妾のために怒ってくれる者を見るのは本当に久しぶりじゃ。

男 ……いや、だから…あのな。

貴婦人 いやいや、暴言気にするな。本来なら車裂きにするところじゃが。誰でも容色は衰えるものじゃ。その絵のようにはいかぬ。外国に嫁いで苦勞もした。子供も産んだ。それに…ちよつと太った。

男 …。

貴婦人 …太ったのじゃ。

男2、帰ってくる。

男2 いやいや、王后陛下、ただいま戻りました。

男 …。

貴婦人 よくぞ戻った。

男2 今、早馬を走らせましたぜ。小一時間もすれば近衛隊に追いつきます。

貴婦人 おお、見事。なかなか気が利くのう。

男2 いやあ。

貴婦人 スイス人も見所があるではないか。

男2 王妃様こそ賢明なご判断。私感服いたしましたぞ。

貴婦人 ほほ、頭脳明晰さは母譲りじゃ。

男2 おお、ご母堂でございますか。

貴婦人 うむ、ウイーンの母上じゃ。

男2 　　：王妃。

貴婦人 なんじゃ。

男2 　　ひよつとしてドイツ語しゃべれます？

貴婦人 当然じゃ。

男2 　　そうだと思つてましたよ。時折見せるドイツ語訛り。

貴婦人 ダンケ・シエン。

男2 　　おお！

貴婦人 グーテン・タック。

男2 　　おお！おお！

男 　　そんなもん誰でも喋れんだろうが。

貴婦人 そういふお前は喋れるのか？ドイツ語。

男 　　当たり前だ。俺もこいつも生まれはアルプスの山奥だぜ。生まれたときからペラペラ喋つてらあ。

貴婦人 おお、田舎臭い。どれ、妾がシエンブルン仕込みの洗練されたドイツ語を教えてやろう。

男 　　ふん、あんたがちよつとドイツ語喋れるからって王妃様である証拠にはならないんだか

らな。

男2 あいつ、まだあんなこと言ってるんですか。

貴婦人 その話はとづくに終わったのじゃ。

男 …。

男2 もう、あんなヤツほつといて、二人でドイツ語会話でも楽しませようよ。

貴婦人 おお、いいのう。

この後、二人で片言のドイツ語会話をする。男2、ダンケしか言わない。

男 ああ、いい加減にしろ。

男2 なに怒ってるんだよ。

男 お前、知らないぞ。勝手に近衛隊を呼び戻して。

男2 勝手に？何言ってるんだ。王妃様の命令だぜ。

男 読め。(日記を放り投げる)

男2 …。

男2、バラバラとページをめくる。男2の顔が険しくなる。

男2 …。

男 この日記は明らかに男のものだ。従って、この女の身分の証明にはならない。

貴婦人 …分からねぬ奴じゃ、その日記は…。

男 国王のものであるという保障はどこにもありません。

貴婦人 …。

男2 …じゃあ。

男 そうだよ、お前はどこの馬の骨とも分からん女の命令を鵜呑みにして鎮圧軍を引き返させちまつたんだよ。

男2 …。

男 …。

男2 王妃ですよね？

貴婦人 王妃じゃ。

男 証拠はない。

男2 うああああ！どうしよう！

男 あーあ。

男2 俺、俺どうなるのかなあ。

男 死刑じゃない？

男2 そんなあ…。

貴婦人 心配するな。お前を処罰はさせん。

男2 おお、頼もしいお言葉。

貴婦人 あれは王妃の命令じゃ。

男 だから王妃かどうか分かんねえだろうが。

男2 俺、急いで命令取り消してくる！

貴婦人 王妃の命令を無視するのか！

男2 だつて…。

貴婦人 妾の命令を無視したらただでは済まさん！

男 もしもこの女が王妃でなかったらそれこそただじゃ済まないぜ。

男2 どうしたらいいんだあ！

貴婦人 …。

男 あーあ、余計なことやっちゃまったな。

貴婦人 …。

男2 下手したら俺は死刑だ！

男 ただの死刑ならいいがな…痛いぜえ、拷問は。

男2 ハアアア。

貴婦人 うろたえるな。

男2 そんなこと言ったって。

貴婦人 それよりお前。

男2 何ですか？

貴婦人 妾、少々催してきたぞ。

男2 …は？

貴婦人 だから…はばかりに。

男2 …ああ、クソですか。

貴婦人 違う！何を申すか。

男2 …。

貴婦人 才…オシッコじゃ。

男2 ああ、そうですか。

貴婦人 手伝え。

男2 は？

貴婦人 何度も言わすな！一人ではできんのじゃ！

男2 何言ってるんすか。こつちは生きるか死ぬかなのに。

男 手伝ってやれよ。

男2 なに？

男 王妃様には忠誠を尽くすもんだろが。

男2 …だつてお前。

男 早くしろ、ここでシヨンベンもらされるほうが迷惑なんだよ。

貴婦人 おお、見事な助け舟じゃ。やはりお前、妾のことが…。

男 いいから早く行つてらっしゃい。

男2 …そうか、じゃあ行つてくらあ。

男 逃げられないようにしっかりと見張れ

男2 おう。

貴婦人 やる気になったか…では、これを持って。

男2 は？

貴婦人、バスケットから装飾の施された瓶を取り出す。

男2 何ですか、それは？

貴婦人 それを持って妾のスカートの中に入るのじゃ。

男2 え！？

貴婦人 しかる後、出てくるものをしっかりと受けよ。

男2 つまり…それは。

男 ははは！すげえじゃねえか。王妃様の下半身を拝めるなんてよ。名誉職だぜ。

貴婦人 そら、しつかり持て。（瓶を渡す）

男2 …あの、これ。

貴婦人 なんじゃ。

男2 これ、ずつとこのバスケットの中に入ってたんですか？

貴婦人 そうじゃ。

男2 …。

男 …。

男2 あげる。

男2、男のほうに自分の前のおつまみをズラす。

男 …。

貴婦人 それ、早くせい。

男2 ああ、はいはい。

男2と貴婦人、舞台から出て行く。男、しばらく何気ない様子をしているが、チラチラとドアの外を盗み見る。その後、貴婦人のバスケットに近づき中をあさる。すると、中から1枚の手紙を見つける。男、しばらく凝視している。すると、男2が戻ってくる。

男2 おい！おい！大変だ！何やってんだお前。

男 え。

男2 あ、お前…勝手に。

男 いや…(咳払い)…やはり曲者はきちんと調べる必要が…。

男2 そうだ！その曲者だ。

男 どうした？

男2 俺が、中身(瓶の)捨てに行ってる間に…。

男 逃げたのか！

男2 すまん！

男 あれほど目を離すなど言っておいたじゃねえか！

男2 不覚だ。

男 逃げちまったもんは仕方ねえ、二人で探すぞ！

男2 おう！

二人、舞台から出て行く。ややして、入れ替わり貴婦人が入ってくる。貴婦人、慌ててバスケットを探る。後、バスケットをひっくり返す。貴婦人、慌てた表情をする。

男 お探しのものはこれか？

いつの間にか男二人、ドアの近くに立っている。男は先ほどバスケットの中から取り出した手紙

を持っている。

貴婦人 貴様！

男 …戻って来ると思っていましたよ。

貴婦人 それを返せ！

男 イヤです。

貴婦人 王妃の命令じゃ！

男 黙らっしゃい。

貴婦人 …。

男 これで貴女の正体はつきりした。この謀反人が！

男2 おい、どういうことだよ。

男 読んでみる。(男2に手紙を渡す)

男2 えーつと…。

貴婦人 止めやよ！

男 読め。

男2 え……え、ああ。……愛するMへ。……M？

男 いいから、読め。

男2 愛するMへ……例の日記、お返しします。陛下のご行動を調べるため、微に細にと、丹

念に読み返しましたが、正直申し上げてあまり役に立ちませんでした。民衆の王室に
対する反感、ますます激しく、市中の警備にあたる時間も多くなりましたゆえ、こう
してお会いできる機会も少なくなりましたが……しかし、いつかこの反乱も収まり、また
国中落ち着きを取り戻しました時にはゆっくと逢瀬を楽しむこともできるでしょう。
……なんだ、付け文じゃねえか。

男 そうさ、偽のな。

男2 偽の？

男 こやつ（貴婦人）、大胆にも王妃の寝所に忍び込み、この手紙と日記を置いて来る算
段だったのさ。

貴婦人 何を言うか！妾は……

男 続きを読め。

男2 お、おう……また……また、考えるだに不忠の極みにはございませすが……方が一、謀反人
どもによつて国王陛下の治世が覆るようなことがありました場合には……彼らはこれを

革命と呼んでいるようですが…あなたをお連れして故国オーストリアまでもに逃がれる所存です。…では、愛するあなたに抱擁を。…あなたの愛するHより。…今度は

アッシユ
Hか。

男　　そうよ、そのHアッシユが問題だ。

貴婦人　ええ！貴様ら、それ以上続けると本当に死刑にするぞ！

男　　どうぞ、あなたにそんな力があるのなら。

貴婦人　言ったな！

男2　　おい…。

男　　どちらにしても私はこの手紙を上官に届けようと思っております。

貴婦人　止めよ！お互いのためにならぬぞ！

男　　はは、盗人猛々しいとはこの事ですね。王室を陥れようとする奸賊めが！貴女の敗因は王妃に似ていなかったこと。私の王妃にあまりにも…あまりにも似ていなかったことです。

男2 お、おい。どういふことだよ？

男 あん、何が？

男2 何がって何もかもだよ。…MとかHとかさあ…わかんねえよ。

男 お前、馬鹿だな。

男2 …。

男 Mってのはマリー・アントワネットのM、Hってのは…王妃の愛人だつて噂のスウェーデン貴族のイニシャルじゃねえか。

男2 ほう、そうなのか。

男 お前…馬鹿だねえ。

男2 うるせえ。

男 …まあ、世の中騒がしい折も折だからな。こんな見え透いた付け文でも王妃の寝所から見つかりやあ…こりや、スキヤンダルだ。

男2 スキヤンダルか。

男 そうよ、スキヤンダルだ。上へ下への大騒ぎだぜ。

貴婦人 いい加減にせい。貴様ら、自分のやっていることが分かっておるのか！

男 もちろん。王妃をお守りしているのです。貴女のような不届き者から。

貴婦人 逆じゃ。貴様のやっていることは妾を追い詰めることぞ。

男 ほう、この期に及んでまだ自分が王妃だと言い張るか。

男2 待てよ。

男 あん？

男2 でもさあ…でも、本当にスキヤンダルならどうすんだよ。

男 ああ？お前…何言ってるんだよ。

男2 だからよお、この付け文がホンモンでさあ。(付け文をふんだくる)スキヤンダルが本当でさ。…まあ、だからこの人がホントに王妃だったらどうすんのつてことよ。

男 …そんなワケねえじゃねえかよ。

男2 つていうか、俺そうであつて欲しい。

男 なに？

男2 だつて、俺もうこの人の命令聞いちゃったもの。近衛隊呼び戻しちやったもの。

男 そんな、お前…。

男2 王妃ですよね。

貴婦人 王妃じゃ。

男2 よし、乗った！

男2、付け文を持ったまま王妃のそばに駆け寄る。

男 おい！

貴婦人 でかした！

男2 貴女が王妃である以外、俺が助かる道はありません。

男 馬鹿野郎！早まるな。王妃がこんな時間にこんな場所をウロウロしてるわけがないだろうが！付け文にしてもあからさまに怪しい…。

男2 るせえ！理屈じゃねえんだよ、理屈じゃ。

貴婦人 そうじゃ！理屈じゃないのじゃ！

男 この逆賊めらがあ。

男2 逆賊はお前だ。

男 考えても見ろ、王妃が国王の日記を外国人貴族に渡すなんて売国行為もいいとこだ。浮気相手とはいえそこまでするか？一国の王妃が。

貴婦人 売国行為じゃと！何を言うか、王妃がそのようなことをするか！

男 でしょう。だからこの手紙は偽手紙だと言ってるんです。したがって、あんたも偽者だ。

貴婦人 その手紙の内容は…本物じゃ。陛下には申し訳ないと思っておる。しかしこれは断じて売国行為ではない。

男 この行為が売国行為でなくして何が売国行為ですか。国王のスケジュールが他国に知れば暗殺の危険にだって遭いかねない。それとも国王の目を盗んでスウェーデン貴族と亡命でもされるつもりだったか？

貴婦人 あの方はそんな方ではない。あの方は…どこか人目のないところで、個人的に陛下にお会いしたがっておったのじゃ。我がフランスの財政をどうしたら良いのか、いかにすれば国民が満足するか、耳を傾けるべき人物は誰なのか…陛下に直言したがっておった。ふん、もつともらしい理屈ですな。しかし、我が王妃はこのような軽率な行動はなさいません。

男2 何でだよ。

男 あん？

男2 だから、何でそう言い切れんだよ。

男 そんなこと…お前、ちよつと考えりや分かることだからだよ。

男2 だからよ、ちよつと考えられねえかも知れねえだろ、王妃様。ハーでさ。

貴婦人 なに！？

男2 俺の行きつけの飲み屋でも噂だぜ、王妃様は色気違いでおつむは白痴なみ。金の計算も出来ねえから、底なしの贅沢三昧。おかげで俺たちや安酒一滴飲むにも散々苦勞せにやならん…。

男 もう一度言ってみろ！（同時）

貴婦人 もう一度言ってみよ！（同時）

男2 いや、俺が言ってるわけじゃねえよ。だから、噂だつての。いや、パリ中の噂だぜ。だからよ…この…まあ王妃様（貴婦人）がだ、なーんも考えないで、ただ愛人に言われるままポンと、旦那の日記を貸してやるぐらいさあ、有り得るんじゃないのかつて言ってるわけよ。

貴婦人 王妃を愚弄するか！

男2 はあ…でも筋は通ってるでしょうが。

男 黙れ！筋もへつたくれもあるか。こんなお美しいお方が色気違いの白痴のと…（肖像画に見入る）。

男2 見た目と頭ん中は大違いつてもあらあな。

男 有り得ん。

男2 いや、愛ゆえにさ。

男 愛？

男2 王妃様、愛人はイロ男ですかい？

貴婦人 その愛人というのやめよ。…うむ、イイ男じゃ。(ニヤニヤしながら男2をバンバン叩く)

男2 な、間男に夢中になつたらモノの善し悪しなんて分からなくなつちまうのが女つてもんさね。

男 何を偉そうに、お前つい最近まで売女しか知らなかつたらうが。

男2 …痛えところを衝きやがるぜ。だがよお、オメエが王妃様のことを信じてえ気持ちちは分かるんだが…王妃様だつて女よ。愛人が持つて来いと言えば旦那の日記だつて持ち出すかも知れねえ。それだけとつてこのお方が(貴婦人)が王妃でないとは言えないんじゃないのか？

男 …。

貴婦人 なんか不本意じゃが…そうじゃ、その通りじゃ。妾も一人の女には違いない。

男2 なあ、どうだい、この辺で折り合つてみちやあ。

男 折り合う？

男2 そうよ、このお方は王妃よ。ね。

貴婦人 王妃じゃ。

男 …。

男2 いや、そうであつてくんなきや困る。だが、お前はそれを絶対認めん。

男 当然だ！

男2 いやいや、だからそれはそれでいいんだ。…だからよお、こうしようじゃねえか。とりあえず、曲者だ下手人だ捕縛だつて…そんな物騒な話はとりあえずナシだ。なあ、その代わり…王妃には近衛隊の方々がお戻りあるまでここでお待ちいただく。

貴婦人 何じゃと！王妃をこんなむさくるしい所で足止めするというのが。

男2 仕方がないでしょう。あなたが王妃だという確実な証拠は今のところ無いんですから。

貴婦人 …。

男2 近衛隊には王妃の顔見知りがあるのでしたな。

貴婦人 うむ、そうじゃ。

男2 近衛隊はみんな貴族の出ですから、彼らに請け負ってもらえればあなたをお通しするに申し分ないわけです。得心行かれたか？

貴婦人 …。

男 …仕方ねえな。

男2 じゃあ、今までの行きがかりは水に流そうぜ。ここは名誉ある休戦とし、ともに飲み

直さん！

男 ふん、飲み直さんも何もまだ一口も付けてねえや。

男2 ああ、そうだったな。おう、今開けるぜ。

貴婦人 待て。

男2 何ですか、せつかく話がまとまりかけてるのに。

貴婦人 …秘密にして欲しいのじゃ。

男2 は？

貴婦人 この手紙のこと、秘密にして欲しいのじゃ。

男2 …ああ、俺は構いませんが。

男 連中次第だろ。

男2 連中？

男 近衛隊のボンボン連中だよ。あんた（貴婦人）が偽者だと証明された時点で俺は全てを告発する。

男2 へ、王妃様がホンモノなら問題ないってワケですな。ホンモノでしょ？

貴婦人 もちろんじゃ。

男2 じゃあ心配ありませんや。

貴婦人 秘密にしてくれるか？

男 だから…あんたがホンモノならな。

貴婦人 そうか、これであの方に迷惑をかけずに済む。

男2 ほお、いじらしいじゃありませんか。情夫イロに義理立てですかい。

貴婦人 まあな。

男2 よろしいですな、やんごとなき方は愛人など持てて。私もいつかは妾めかけの一人や二人囲える位の禄が欲しいもんです。ふははは。

男 たわけが、現実に目を向ける。お前が愛人なんて一生無理だ。

男2 ふん、テメエだつていい加減目を覚ましやがれ。

男 何？

男2 いつまでも絵の中の王妃なんか追っかけてんじやねえ、童貞かお前は。手近な女あ抱くことでも考えろ。

男 けつ、お前に王妃様の良さが分かつてたまるか。

男2 お前、王妃の犬だな。

男 …なに？

男2 けはははは。

貴婦人 …。

男 …お、お前。

男2 あん？

男 自分が何言ってるか分かってんのか？

男2 分かってるよ…王妃の犬。

貴婦人 …。

男2 けはははは。

貴婦人 …。

男 今のお前は、何だ。

男2 あん、俺？俺は童貞じゃねえよ。

男 そっちの話じゃねえ。この人（貴婦人）は誰だ。

男2 王妃様さ。

男 お前は誰の味方だ。

男2 王妃様さ。

男 じゃあ…お前は何だ。

男2 だから童貞じゃ…。

男 そうじゃねえ。

男2 何だテメエ！バカにしてんのか。

男 そりゃこつちの台詞だ！お前が王妃の犬かどうか聞いてるんだ！

男2 ああ、そんなもんお前…。

男 …？

男2 …犬だよ。

男 …お前、犬の意味分かってねえだろ。

男2 だからよお、王妃様に…夢中になつちまつてるヤツの事…かな。

男、ため息をつく。

貴婦人 ほほ、不忠者の下らん中傷ぞ。…王妃の犬とは…王妃のご機嫌をとって、王妃と一

緒に悪い陰謀を企むような、卑しい輩のことじゃ。

男2 …あ、そうなのか。

男 そうなのじゃねえ。

男2 いや、行きつけの飲み屋でよく言われるんだよなあ。…いい意味かと思つてたぜ。

男 お前、そんな程度の低いところに通つてるから頭悪くなるんだよ。

男2 いや、だつてよお。…言われるんだぜ。スイス人はいいなあつてよお。年季が明けるまでクビにならねえしき、タダメシ出るし。国から給料もらつてるんじゃないや貴族とおんなじだな、つてさ。…で、最後に言われるわけよ。王妃の犬がつて。

男 …。

男2 …なあ、いい意味だと思うだろ？

男 …皮肉だよ。

男2 あん？

男 気がつかねえのか。スイス人は王妃の飼犬で、俺たちの敵だからこんな所に飲みに来るんじゃないやねえつて、言われてるんだ！

男2 ははあ、なるほどね。

男 …けつ、同盟兵の面汚しが。

貴婦人 …不満か？王妃の飼犬は。

男 不満なもんか、俺は王妃に忠誠を尽くしている。…だが、俺のオヤジも祖父さんも、

代々傭兵だった。俺たちはフランス人の代わりに戦場いくさばに出て、フランス人の代わりに命のやり取りをし、フランス人のために死んでいったんだ。

男2 へ、金を貰っちゃいるがな。

男 うるせえ、黙れ！だからよお、フランス人のクセにスイス兵をバカにするヤツを俺は許せねえのさ。

貴婦人 良いではないか、言いたいものには言わせておけば。…妾も若い頃、陛下の世継ぎを産めずによく陰口を叩かれたものぞ。じゃが、それも今となつては遠い日の思い出じゃ。不忠者の言葉に耳を貸す必要はない。王妃に忠誠を誓う者が讃えられる日が、必ず来よう。

男 …。

貴婦人の。

男 ふん、あんたに慰められてもな。

貴婦人 慰めではない。頼りにしておるぞ。

男 …。

貴婦人 考えてみればお前たちのような兵士が守ってくれるから、妾も枕を高くして寝られ

るのじゃな。

男 別にあんたを守ってるんじゃねえよ。

貴婦人 よいよい。身の証がないのは妾の手落ちじや。近衛隊が到着するまでゆるりここで待つことにしよう。

男2 ほお、殊勝なお言葉ですなあ。

貴婦人 お前(男)、さっきのはなかなかの演説じゃった。

男 …。

貴婦人 ちよつと心が動いたぞ。フランスはお前たちのような兵じゅうむすに感謝せねばならん。

男2 ひひ、誉められちまったな。な(男に)。

男 …逃げなくていいのか。

貴婦人 ん？

男 もうすぐ近衛隊が帰ってくるぞ。

貴婦人 …だからどうした。

男 王妃を騙った事がばれたら間違いなく死刑だ。

貴婦人 …。

男 逃げろ。今なら見逃してやる。

男2 おい、お前何言つて…。

貴婦人 ほほ、何を逃げる必要があるか。

男 何でだ！

男2 おい…。

男 何でお前が王妃なんだ！

貴婦人 …。

男 これ(肖像画)見ろ！年季が明けた親父がパリから帰ってきて俺にくれた唯一の土産だ。俺もう、初めて見たんだよこんなキレイなもの。スイスにや田舎モンの野暮ったいネエちゃんしかいねえからさあ。思ったよ、フランスに行きやあこんなキレイなお姫さんがいるんだつてよ。

貴婦人 …。

男 オヤジの商売が失敗して俺も兵隊になった時、コイツだけが俺の心の支えだった。住み慣れた祖国を発つて、二度と生きて帰れねえかもしれないねえフランスなんぞに行く、これが俺の唯一の理由だったんだ、この絵が！バーゼルからパリへ続く道を…俺はコイツを握り締めて…。

貴婦人 ちよつと見せてみよ。(肖像画をひつたくる)

男 あ!

貴婦人 ふーん。

男 何すんだ!

貴婦人 美しいのう。

男 …ああ。

貴婦人 14歳じゃな。覚えておる。母上が妾と陛下の結婚をまとめようとしてフランス中にばらまいた絵の1枚じゃ…少しばかり美化されておるが。

男 いや、大分…。

貴婦人 こんな絵を後生大事に持つておるとは。

男 こんな絵とは何だ!

貴婦人 見よ、お前の目の前にいる女を。これが本物じゃ。

男 …。

貴婦人 許して欲しい。

男 いや…許すも何も。

貴婦人 あの時オーストリアはおおいぐさ大戦を繰り返しておった。フランス、プロイセン、ロシアそれに帝

国内の日和見領主ども。母上はその全てに対して果敢に応ぜられ、いかなる苦境も切り抜けて今日のオーストリア帝国を築いた。じゃが…いかに母上といえど全ての国を敵にはできぬ。そこでかねてより戦に倦み果てていたフランスとの同盟を望まれたのじゃ。妾をフランスの王太子に嫁がせることで、同盟はより強力になる。じゃが、フランスとオーストリアは互いに長き争いを繰り返してきた間柄じゃ、民らのオーストリアに対する感情も相当に悪かった…そこでフランス王室が婚姻に二の足を踏まぬようばら撒かれたのがこの絵じゃ。

男 …絵一枚でどうにかなるんですか、国民感情つてのは。

貴婦人 自分を見れば分かります。結果はすばらしいものじゃった。妾の美しさはフランス全土に宣伝され、結婚賛成の気運が高まった。何より前の国王陛下は美しい娘が大好きじゃったからして…。

男2 なに？息子の嫁に手を出そうってのか？

貴婦人 孫じゃ。今の国王陛下は前国王の孫に当たられる。

男2 同じようなもんでさあ。孫のほうがもつと性質たちわりが悪いや。

貴婦人 まあ、それが政略結婚というもぞ。要するに結婚に両国が同意して、戦が起ころなければそれで良いのじゃ。お前ら、戦地に送られたいか？

男 覚悟はできてる。

男2 俺はやだ。

男 …。

貴婦人 ほほ、まあ正直なところみんなそんなもんじゃろ。勇敢なるスイス同盟兵といえどもな。良いのじゃ。友好の証として他国に参り、和平を保つ。それも王族たる妾の使命なのじゃ。じゃが、その後が大変じゃった。ちよつと、事情があつての、陛下との間には世継ぎが生まれなかつた。7年間もな。

男2 ああ、俺知ってる。王様ホーケー…。

男 お前ちよつと静かに…。

貴婦人 ほほ、知っておったか。そうじゃの、あれだけ噂になれば知っておつても不思議はない。

男 …。

貴婦人 国王陛下は非常に深刻な…包茎じゃった。妾と床を共にすると痛がるのじゃ。…ま

あ、考えてみれば陛下もかわいそうじゃが…しかし、世継ぎを産めずに王妃でいる妾の立場もそれは大変だったのじゃ。口さがない貴族や王族たちの陰口にじつと耐えねばならなかったし、王位篡奪を企む不屈き者の暗殺にも怯えねばならなかった。…そんな時、あの方に出会ってしまったのじゃ。

男2 例のスウェーデン貴族ですかい。

貴婦人 そう。それはもう、イイ男じゃった。じゃが、王妃である身では妾は好きな男と添うことはできぬ。妾は若さを持って余したぞ。そしてもちろん、あの方もそれは同じじゃ。…それから15年。15年もお互い忍びあつてきた。

男 …。

男2 なんか…かわいそうっすね。

貴婦人 政略とはいえ母上は、この結婚による両国の和平を真に願つておつた。そのためにこの絵はばら撒かれたのじゃ…じゃが、民らもこのところは妾のことを良くは思っていないと聞く。(砲声)かわいそうな陛下もこの通り妻に背かれておるし…妾も愛する方とは一緒にはなれぬ…そして、お前(男)も…この絵で幸せになったものなど誰もおらぬ。

男2 …悲しいっす。あまりにも。

男 …。

貴婦人 ……妾を王妃と、信じてくれるか？

男 ……

男2 この場より立ち去られないことが何よりの証拠。な。

男 ……ああ。

貴婦人 そうか。

男 ……こうなつた以上は…(椅子を降りて膝まづく)忠節を…尽します。王后陛下。

貴婦人 ほほ、堅苦しいことは抜きにしようぞ、お前らしくもない。傭兵の友達なぞ初めてじ

やゆえ……妾もよろしくのう

男 と、友達ですか。

貴婦人 うむ。

男 恐れ多い。

男2 あのさあ。

貴婦人 何じゃ。

男 テメエ！王妃様に何て口きくんだ！

男2 ……けつ、自分のこと棚にあげてよく言うぜ。

貴婦人 よいよい、言うてみ。

男2 は、あのう…じゃあ、皆々様円く納まったというコトです…もう、近衛隊を呼び戻す必要は無いんじゃないんでしょうかねえ。

貴婦人 ああ…そうよの。

男 そうだな。

男2 このうえは王妃様も、我々の警護では不安ということもないでしょうし…鎮圧軍撤退の責任を問われましたら私も王妃も…その、色々と面倒ですしね。

貴婦人 うむ…お前も、良いな？

男 お心のままに。

貴婦人 では、その使者、お前(男2)に任せる。早急に鎮圧軍をパリに向かわせよ。

男2 はは！

男2、一礼して立ち去る。

貴婦人 ほほ…おう、疲れたのう。

男 は。

貴婦人 …考えてみればなかなか愉快的な一日じゃった。あの方とも会うことができたし。友

達も増えたしのう。

男 ……恐縮です。

貴婦人 ちと眠いがな(あくび)。

男 おお、申し訳ありません。お寝み下さい。

貴婦人 ほほ、気遣い無用。まだこうして喋っていたい気分ぞ。

男 ……左様ですか。

貴婦人 このように遠慮のうモノの言い合いをしたのはシェーンブルン以来じゃ。…王宮から離

宮に移つてからというもの…古い友人もあまり遊びに来ぬようになってしまったしな。

男 ……

貴婦人 何がいかんというのじゃろうか。妾は母上のように子供と遊びながら普通に生活し

ただけなのじゃ。宮廷に居つては我が子と語らう時間など無いのと同じぞ。…彼らは

妾の転居に反対し、聞き入れられぬと姿を見せなくなつてしまった。

男 ……

貴婦人 お前はどうか思う？

男 は？

貴婦人 ……妾は間違っていると思うか？

男　私が王妃に意見することなどできません。

貴婦人　そう申すな。先ほどの調子で頼むぞ。

男　…。

貴婦人　さあ、どうした。

男　…それも忠義ならば。…王后陛下は、すぐに王宮にお戻りあるべきかと思えます。

貴婦人　やはりお前もそう申すか。

男　私のような下賤なもの。王宮がどのような所かもよく存じませぬ…しかしながら…

俺の母ちゃんだつてずっと俺と遊んでくれたわけではありません。

貴婦人　？。

男　オヤジがこのフランスに年季奉公をしている間、母ちゃんも里の糸こうばより工場こうばで働いてい

ました。仕送りだけじゃ足らなかつたもんで。…そう、ウチに帰つて来てもすぐに家事やらなんやらに追われていましたからな。話してもらつたり遊んだでもらつたりした記憶記憶など数えるほどです。

貴婦人　…。

男　まあ、私には兄弟が大勢おりましたゆえ、寂しいと感じることもあまりありませんで

したがな。親が気を揉まずとも、餌さえやるとけば子供は勝手に育つもんですよ。

貴婦人 ……そういうもんかの。

男 スイスの貧乏家族の話ですから王室のご家族とは比べるほうがおかしいのかもしれないが……ご子息は何人兄弟ですか？

貴婦人 2人じゃ、3人じゃったが先月一人身罷った。

男 ああ……左様でしたな。これは、至らぬことを。

貴婦人 よいのじゃ。王侯の子弟とはいえ、皆が壮健に育つわけではない。覚悟はしておった。

男 ……お痛わしいことです。この上、さらに重荷を背負えというのはあまりに残酷かもしれません。

貴婦人 申せ。意見を求めたのは妾じゃ。

男 ……あやつの申しておったこと。あれは本当です。

貴婦人 と申すと？

男 行きつけの酒場で王妃様を白痴の色気違いのと。

貴婦人 ああ。

男 ……ご存知かとは思いますが……下々での王后陛下のご評判、あまり芳しいとは申せません。

貴婦人 …。

男 …ことにこの離宮に移り住んだことで、国政を放り出し、スウェーデン貴族を侍らせて贅沢の限りを尽した生活をされているとの印象は拭えぬようになりました。

貴婦人 …。

男 …これがルイ14世太陽王の御世なら話は別でしょうが。しかし前国王の治世以来、フランスの民草の貧しきといたら…。

貴婦人 そんなに酷いのか。

男 …貧しかった私の郷里よりもさらに一段と貧しく。毎日パンひと切れ口にできるかどうかさえおぼつきません。

貴婦人 …そうか。

男 …ここは王宮にお戻りあり、少しでも民らの信頼を得ることをお考え下さい。さもなくば…。

貴婦人 さもなくば？

男 …先ほどの手紙にもありました…革命ということにもなりかねません。貴婦人 ふむ。

男 …どうぞ、一人の母親である前に、フランス国民の王妃であって下さい。

貴婦人 …。

男 お約束を。王后陛下。

貴婦人 …もう一つ。

男 …は。

貴婦人 もう一つ手放せぬものが妾にはある。

男 …。

貴婦人 あの方じゃ。

男 …王后陛下。

貴婦人 今日、あの方と会った。…ずっと、このフランスに居てくださると。

男 …。

貴婦人 祖国での地位も荣誉もあきらめて、この妾のためにずっとフランスに留まってもよいと

言ってくださったのじゃ。

男 …。

貴婦人 のう、お前…最近妾はこう思うことがある。その…革命とやら…市井の者どもが申す革命とやらが起つてくれぬものかと。

男 何ということぞ！

貴婦人 このブルボン王朝を何もかもメチャクチャにして、妾が囚われているこの地位から、妾を解き放つてもらえぬものか…そうして、どこかあの方と他の国へ逃げることはできぬものか…そう思ってしまうのじゃ。

男 不埒な…なんという。

貴婦人 それほどにあの方への思いは強い。

男 では、あなたはフランス王国の王妃である前に…一人の女でありたいと申されるのか!?

貴婦人 女一人、ここに閉じこもっておれば勝手に滅びてしまうような弱い国なら、遠からず破局が訪れよう。それとも…妾が王宮に戻ったら何か変わるといふのか! 妾は母上のラ・ピエセルような女傑ではない。カトリーヌ王妃のような冷徹さも、少女のような狂信もないし、ポンパドゥールのような野心もない! 今の妾にあるのは子供たちと、あの方と…この離宮でのんびりと暮らす。その希望だけじゃ!

男 …王妃。

貴婦人 …許せよ。このようなこと、おしゃべりな廷臣どもの前ではとても言えぬ。

男 …それならば私とて。

貴婦人 お前は信用しておる。

男 ……そのような不用意な。

貴婦人 仮にお前がバラしても、もつとひどい噂がすでに飛び交っておるしな。

男 ……。

貴婦人 宮廷には戻ろう。

男 ……おお。

貴婦人 ただあの方だけは手放すことはない。どうしてもそれが許されぬときはこの国とともに妾も滅ぶ所存じゃ。

男 ……。

「このとき、男、帰ってくる。

男2 王后陛下！

貴婦人 おお、ご苦労であった。

男2 た、大変です！

男 どうした。

男2 バ、バステイーユが…陥落しました。

貴婦人 なに！

男 パリに駐屯してる部隊は何をやってたんだ！

男2 俺も詳しいことは聞いてねえが、町のあっちこっちにガラクタが積んであつて身動きが取れなかつたらしいぜ。

男 ガラクタ！？ガラクタつてお前がさっき言つてた。

男2 ああ、どうも暴徒どもが積み上げやがつたらしいな。

男 誰がそんな入れ知恵を…。

男2 知らねええよ、とにかく伝令がそう言つてたんだ。…それから、あれだ。衛兵隊が裏切りやがつた。

男 …おいおい。

男2 あいつら貧乏人ばつかだからな。一皮剥きや暴徒と変わらん。それと追い討ちが…。

男 まだあんのか？

男2 おう…増援が間に合わなかつた。

男 …。

男2 増援部隊がよ、モタモタしてつから…。

貴婦人 増援というのは…つまり。

男2 はっ、我々が呼び戻した近衛隊であります！

男 …。

貴婦人 …。

男2 衛兵隊が寝返りました時、他の部隊にも動揺が走りましたようです。奴らの中にも平民は多くございますからな。戦線はにらみ合い、各部隊動きが取れず…仮借なく攻撃を加えることができるのは貴族だけで構成される近衛部隊のみ…しかしながら。

貴婦人 もう良い。

男2 戦線が膠着している間にバスターイーユ守兵は投降。司令官のド・ローネー侯はパリ市庁舎へ連行される途中…殺されました。

貴婦人 …。

男2 近衛隊は…現在待機させております。ご命令を。

貴婦人 …。

男 王后陛下、一度王宮に戻られるべきではありませんか。

貴婦人 …。

男2 近衛隊の奴らはどうすんだ？

男 待たせときゃあいい。

男2 なに悠長なこと言ってるんだ！バステイーユは難攻不落だぞ、すぐに奪い返さねえと大変なこと…。

男 命令があつちこちから出たら混乱するだろうが。バステイーユを乗っ取られようと暴徒どもは所詮烏合の衆だ。すぐに取り返せる。

男2 甘えぞ、連中の指揮を取ってるのは衛兵隊だぜ。組織される前に潰さねえと…。

男 とにかく王后陛下をお連れするのが先だ。

男2 奴らが立て籠もる前に蹴散らすべきだ！

男二人、王妃に向き直る。

男二人 王妃、ご決断を！

貴婦人 …。

男二人 …。

貴婦人 寝る。

男 王后陛下！

貴婦人 疲れた。

男2 なに言ってるんすか。

貴婦人 良きに計らえ。

男 さつき王宮に戻ると仰つたではありませんか。お忘れか。

貴婦人 おお、それのう…日を改めてな。

男 今がその時です！

男2 パリにいる部隊にも命令らしい命令は一度も出ていません。

男 本当か！？

男2 ああ、どの部隊も牽制し合つちまつて思い切つた行動が取れんらしい。

男 何やってやがるんだ！お偉いさんどもは。

男2 このままでは暴徒を調子づかせてしまいます。お下知を。

貴婦人 …妾は軍人ではない。そういうのは男の仕事じゃ。

男 その男が頼りにならんのです。

貴婦人 これまでも謀反人どもには散々讓歩してきた。彼らの言うままに財務長官を任命してやったし、国民議会なる怪しげな集まりも認めた。今更刑務所ひとつ失つたところで痛くも痒くもないわ。

以下、貴婦人と男の台詞は同時進行。

男　今、刑務所ひとつ譲れば、今度はパリが取られます。パリを譲れば今度は国が取られます。

貴婦人　うんざりじゃ。

男　そのうち、ベルサイユもこの離宮も取られます。

貴婦人　皆でよつてたかつて妾を陥れようとしおつて。

男　彼らはあなたを生かしはしまい。

貴婦人　いくらでも妾から奪うがいい！

男　あの方との逢瀬もこれまで。

貴婦人　望むなら王妃の位もくれてやる。この苦しみとともに！

男　最後にはお子らの命も取られるでしょう！

最後の男の台詞はしっかりと聞こえるように。

貴婦人 な…。

男 彼らは、王室を、とりわけ王妃を憎んでいます。

貴婦人 …。

男 あなたに連なるものは皆殺しとなる。

貴婦人 …。

男 あなたはご自分の責任から逃れることはできません。

貴婦人 …なんとということ。妾はフランス国民2000万を、みな心から愛しておるつもりじゃつた。それは初めてパリを訪れた日、敵であったハプスブルグの皇女を歓呼して迎えてくれた、あのときの民らの姿を心に刻んでいたからじゃ。妾を悪く言うのは、一部の下品なやくざ者どもだけじゃと…そう思ってきた。まさか…これほど多くの者らが妾を憎んでおようとは。

男 …。

貴婦人 おお…国民らはみな妾の幸せを望んでくれているものと思っていたのに…その民らに軍隊を差し向けねばならんのか……そうでなければ王朝潰え、妾の命は奪われる。あの方とも今生の別れ…何より子らも長らえることは出来ぬと…。

男2 …王后陛下。

貴婦人 王妃などになるものではない。今すぐ14歳に戻り、何と言われようが縁談など断つてしまいたい。…そうじゃ、いつそ平民に生まれれば良かったのじゃ。貧しくともこのよ
うな苦しみの無い平民に…。

男 心中お察ししますが、王妃…そのようなことを申している場合では…。

男2 いや、結構な策じゃねえか。

男 あ？

貴婦人 …。

男2 行きつけの飲み屋でよく聞く話なんだけどさあ。

男 またその話か。

男2 黙って聞けよ。…いいですかい、王妃様。俺の飲み仲間にアメリカ帰りの志願兵がお
ります。

貴婦人 おお、アメリカか…あの方も行っておったぞ。

男2 おお、では話が早い。アメリカがどのような所かは聞いておりますな。

貴婦人 もちろんじゃ。

男2 アメリカはイギリスから独立してからというもの、王も無く、貴族もなく、民らから
出た代表が国を動かしておるそうです。

貴婦人 うむ。

男2 彼らは例外なくイギリス王を憎んでいて、イギリス政府がかかる重税が気に入らない。だから戦を起こしたのです。

貴婦人 うむうむ。

男 だから何なんだよ。

男2 まだ分かんねえのかよ。頭悪いなあ。

男 お前に言われたくねえよ。

男2 暴徒どもの言い分にそっくりなんだよ。

男 …ああ。

貴婦人 おお。

男2 どうも俺はね、暴徒どもはアメリカみてえな国を作りたがつてるんじゃないかという気がするんですよ。王様も貴族もいねえ、税金の安い国です。

貴婦人 ほう。

男 で、どうする気だ。

男2 だからよお、決まってるじゃねえか。平民になればいいんですよ。王妃様が。

男 …？

貴婦人：そうじゃな。

男　なに言ってるんですか！

男2　考えても見ろ、イギリスがなんで失敗したか。そりゃあ、遠いヨーロッパにいて会ったこともねえ王様がピンとこなかったからさ。自分と関わりのなさそうな王様に高え税金持つてかれる。アメリカの連中、それがどうしても気に入らなかつたんだ。王様が王様のままでいたことがイギリスの失敗なのさ。

男　そんな：めっちゃくちゃな。

男2　平民になつてください。

貴婦人　なる。

男　いい加減にしろあんたら！

男2　暴徒どもにとっちゃ自分たちの上に誰かいて、それが自分らの税金使つて贅沢してるつてのが許せないんです。ゆえに貴族が貴族でなくなり、王妃が王妃でなくなれば奴らは納得するはずです。

貴婦人　なるほど。言い得ておるな。

男2　どうもそれが革命つてやつらしいですよ。これも飲み屋で聞いた話ですがね。

男　お前そればつかな。

男2 革命つてやつが起これば、王様も貴族も無くなる。金持ちも貧乏人もいなくなつて、そりやあもう自由で暮らしい世の中がやつて来るそうですよ。

男 騙されないで下さい！王妃。

男2 身分の差なんかないんでね、だれもが友達になつて抱き合つて結婚できる。反対する奴は誰もいない。そういう世の中になるんだそうです。

貴婦人 おお、それ、いいのう。

男2 王妃様にとつては理想的でしょう。

男 お前、いい加減にしろ！

男2 もう人目を忍んで逢引なんてケチな真似する必要はありませんや。あの方と国民の前で堂々と、大股広げてまぐわつて下さい。こう、ガバツと。

貴婦人 いいのう。それ、いいのう。

男 テメエ！撃ち殺してやる。そこになおりやがれ！

男2 何だよ、いい考えだと思つたのになあ。

男 お前誰から給料貰つてんだ！王様だろうが！

男2 まあな。

男 俺たちにとつちや王様が神様なんだ。王様に忠誠を尽くさねえとメシの食い上げな

んだよ！

男2 違うだろ。

男 何！

男2 俺達あ戦のために雇われてんだ。王様がいなくなつたつて戦がなくなるこたあねえよ。現にアメリカがそうだろうが。

男 下らねえ理屈こねやがつて！スイス同盟の兵士はそう簡単に主を裏切らねえのが誇りじゃねえのか！

男2 昔はな。

男 何い！

男2 俺達が忠節無比だったのは、そうすりゃあスイス傭兵が高く売れたからさ。他に商売も出来ねえから俺たちも田舎もん丸出して時代遅れの騎士ぶつてたんだろうが。だが見ろ、もうこの国の人間は誰も王様には従わねえ。ブルボン家の天下は今日でお終いだ。スイス同盟の一番のお得意様はもうじきいなくなるんだ。

男 この日和見野郎があ。

男2 日和見結構だね。もともと俺たち傭兵は日和見稼業じゃねえか。余分に1スーでも多く出してくれる側につく。

男 …。

男2 時代が変わるんだ。しょうがねえさ。俺も討ち死にはご免だからな。ここは王妃様に平民になつていただいて、戦火を鎮めようじゃないか。

男 …無理だな。

男2 あん？

男 そんなこと貴族は誰も納得しねえぞ。

男2 そうかもしんねえなあ。だが俺は遠からず、貴族だつて平民にならざるを得ねえよ。うな気がするぜ。(貴婦人)にあに、地位も財産も差し出せば命までは取られないでしょう。それで暴民ども、ガタガタ言う様だったらそのときこそ奴らと一戦交えてやりますよ。ははは！

男 フランス・オーストリア同盟はどうするんです！

貴婦人 …。

男 あなたが平民になどなつたらフランスとオーストリアはまた敵対関係になります。

男2 おお、いいじゃねえか。失業しなくて済むぜ。

男 うるせえ！お前は喋るな。…あなたは亡きご母堂の期待を裏切るのですか。

貴婦人 …そうよのう。

男2 心配してもしょうがないと思っぜ。どうせヨーロッパから王様なんていなくなる。

男 何だと！

男2 ヨーロッパ中、貧乏人の暮らしたなんて似たり寄ったりよ。フランスで革命ってことになればどの国も右に倣えで革命騒ぎさ。そうなればヨーロッパから王様なんて一人もいなくなるって寸法よ！

男 非常識な！

男2 よく考えてみりゃあ、いがみ合ってるのは王家と王家。支配されてる俺たちには怨みもつらみもない。そうなりや同盟なんて何の意味もないさ。そうだろう？

男 …。

男2 いや、逆にこうなるかもな…フランスとオーストリアだけじゃなく、フランスとアメリカも、スペインも、ロシアもトルコも、イタリアも、敵も味方もいなくなる。どの国も、自分以外の全ての国に対して、永久にしのぎを削りあう。王妃が王妃のままていようと平民になろうとそうなつて行くだろうな。万人の万人に対する戦いが今始まるんだ。

男 …お前。

貴婦人 意外に勉強家じやの。

男2 …いや、正直言ううと飲み屋でアジつたヤツの受け売りでさ。あんまりしつこいんで覚

えちまつた。

男 お前一体どこの飲み屋に通つてんだ。

男2 パレ・ロワイヤルにある…。

男 謀反人どもの溜まり場じゃねえか。

男2 どこで覚えた理屈だろうが構わねえだろうが。とにかく時代の流れはそうなんだ。

今日、それを確信したぜ。この上は、せめて可哀相な王妃様の思いだけでも遂げさせてやろうぜ。

男 …。

男2 革命万歳！

貴婦人 イヤじゃ。

男2 は？

貴婦人 妾は王妃のままでおる。

男2 なに言ってるんすか。さつき平民になるって言ってたじゃないですか。

貴婦人 妾が平民になったら、あの方も平民になつてくださるだろうか？

男2 いや、それはあの方に聞いてみないと。

貴婦人 ならぬ！あの方は平民になぞならぬぞ。

男2 はあ。

貴婦人 あの方は誇り高い方じゃ。恩顧のブルボン家を捨てて平民になど決してならぬ。

男2 いやあ、しかし事ここに及びては否応ありません。このまま暴民どもが力をつければ貴族でいること自体が罪となるでしょう。革命しからずんば死です。

貴婦人 ならば、あの方は迷わず死を選ばずじゃ。そういう方なのじゃ。

男2 困った方ですな。

貴婦人 それに妾が平民で、あの方が貴族では身分違いでやっぱり結婚出来ぬ。結婚出来ぬでは革命なぞ意味がないぞ。

男 待つてました。では、私と共に王宮へ参りましょう。

貴婦人 何のために。

男 は？

貴婦人 何のために帰るのじゃ。民らの信頼を得る為か？それとも妾に軍隊の指揮でもせよというのか。

男 両方でございます。

貴婦人 馬鹿馬鹿しい。今さら王室に楯突く暴民のご機嫌など取らぬ。また、国王陛下がおられるのに差し出がましく軍隊に命令などできぬ。

男　では、どうされる？このまま事態を放置されるのか。

貴婦人　そうは言わぬが、これは王妃の仕事ではないと申しておるだけじゃ。

男2　よせよせ、もう何を言っても無駄だ。

男　…。

男2　何だかんだと理由をつけて、結局、王后陛下はこの離宮での生活を手放したくないだけなのさ。

貴婦人　それは違う。

男2　では選ばれよ。革命には従わない。王族の義務も果たさないでは通用しませんぞ。

貴婦人　選ばぬ。

男2　王妃！

貴婦人　妾はここにおる。ここにおつて、お友達と、子供らと…あの方と…優雅にガボットでも踊っているでしょう。

男2　ここでの暮らしは所詮が婀娜花^{あだばな}。何時の日か押し入れられ、むしられ、踏みつけにされましようぞ。

貴婦人　妾はここで暮らす。あの方とも離れん。

男2 …。

貴婦人 平民にならばなつても良い。じゃが、それは妾が決めること。今、こぶしを振り上げて、民らが妾を平民にしようとするなら、妾は彼らに王妃として臨もう。

男 では、軍隊を…。

貴婦人 その手も辞さぬ。しかしそのために王宮へは戻らぬ。王妃たるもの泰然自若と構えて動かぬべきじゃ。

男2 では、この場より近衛隊を差し向けましょう。

貴婦人 いかん。ここより王妃の名で軍を動かせば、妾が暴民に怯えているとも映りかねん。

ここは、革命などどこ吹く風。王妃たるもの泰然自若と構えて動かぬべきじゃ。

男2 あんた本当は面倒くさいだけだろう。

貴婦人 妾は毅然としてここにおる。ここにおつて、お友達と、子供らと…あの方と…優雅にガボットでも踊っているでしょう。

男 …死にますよ。このままだと。

貴婦人 これが王妃の仕事。ここで遊ぶこと。ひたすらに退屈を恐れること。妾は死を恐れぬ。妾こそ宮廷の優雅、王家の栄華。この時代に与えられた妾の使命。ならば死が訪れるまで子供らと…あの方と…ガボットでも踊っているでしょう。毅然として。

男2 王妃…。

男 お考え直しを。

貴婦人 …妾は婀娜花。何時の日か押し入れられ、むしろ、踏みつけにされる。

男 手をお打ちください。そうなる前に。

貴婦人 窮地に立てばおろおろとし、生き残るためにのた打ち回る。これは王妃の姿ではない。

男 では、お子らはどうされる。あなたは良い。あなたの矜持で死んでいくのだ。あなたの情夫も良いだろう。あなたのために死んでいくのだから。だが、子らはどうなる。あなたが手をこまねいたばかりに死んでいく、あなたのお子はどうするのだ。

貴婦人 …。

男 さあ、こうしていることは出来ません。一刻も早く王宮へ。

貴婦人 妾はここにおる。暴民どもの前で冷然と遊ぶ。妾は神によってフランスを治めるよう定められた。妾は神の意思でここにおる。故、ここに遊ぶことが妾の仕事。優雅たるこそ妾の使命。ここにて子らも命を落とすのならば、それが我が子らの仕事。我が子らの使命。

男 そのような身勝手な理屈がありますか！

男2 お覚悟見事。

男 お前。

男2 王妃はここに逃げ込むのではない。王妃という立場から一步も引かんと云ってるのさ。反省しない、最後まで遊び狂ってやると。まったく大した女傑よ。

男 下らん意地だ。下らん意地だよ。

貴婦人 …。

男 ご主君、今なら亡命でも何でもできます！

貴婦人 …いやじゃ。

男 私はあなたが死ぬを見たくない！

貴婦人 …。

男 お命大事に。お命大事に！お考え直しを！…王后陛下。

貴婦人 …いやじゃ。

男 ああ、御身遊ばざれば死なず。恋せざれば殉ぜず。何ゆえ…何ゆえ…。

貴婦人 これが妾の仕事。この時代に与えられた妾の使命。

男 …。

貴婦人 マリー・アントワネットはフランスの女王なのですから！

男二人 け、気高^{けだけ}え。

完